

おとす・おろす・さげる・たらす

成 田 徹 男

1. はじめに

今までに、これらの動詞およびその周辺の動詞について、次のような分析がある。

まず、国広1970に、表Iのような、当該語彙の分析例がある (p.157)。これは、奈良毅のものに国広が修正を加えたものである。

	オロス	オトス	タラス	サゲル
物の位置を移動させる	+	+	+	+
高所から低所へ	+	+	+	+
高所に元来存在している	+	+	-	-
重力の働くままにまかせ	-	+	+	-
物の上端が何かに付着している	-	-	+	+
極点まで (終結相)	+			
ある程度 (非終結相)	-	+	+	-

表 I

柴田1976には、長嶋1973「サガル・オリル・オチル・クダル」のほか、山田1973「アガル・ノボル」、長嶋1975「ツル・ツルス・サゲル・カケル」などがある。

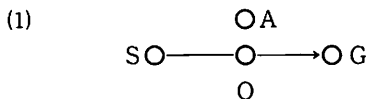
このほか、宮島1972は、当該語彙についても豊富な用例と記述・分析を示しているし、森田1977にも示唆深い分析がある。

以下の分析においても、これらの分析・用例などを活用させていただいた。

2. 「移動」と自他

4つの動詞は、ものの移動をあらわし、その方向は原則的に上→下である。仮に素性として示すなら〔+移動〕〔+上から下〕となろう。

4動詞の格構造は、ほぼ〔A O(SXG)〕とあらわすことができる。Aは動作主 (Agent), Oは対象 (Objective), Sは起点 (Source), Gは目標 (Goal) をあらわす。これらの格の相互関係を (時間性を捨象して) 図式化すると次のようになる。



矢印が移動であり、Oが移動するものである。Aはこの外にあつて、Oに対してある働きかけをしていると考えられる。

長嶋1973のとりあげている「サガル・オリル・オチ

ル・クダル」は、移動自動詞である。これらは〔O(S) (G)〕あるいは〔 $\overset{A}{O}(SXG)$ 〕という格構造をもつ。 $\overset{A}{O}$ とは、同一名詞句がAかつOであるような場合である。つまり、みずからがみずからを移動させるわけである。

ここでとりあげる「おとす・おろす・さげる・たらす」は、対応する自動詞形として「おちる・おりる・さがる・たれる」をもつが、意味的にいつも対応するとは限らない。この点にたちいると、上述の格構造そのものについての議論となるので、次の点の指摘にとどめる。例えば、「たれる」という自動詞も次のような時は、他動詞のような意味をもっているのではないか、ということである。

(2)a 糞をたれる。

b 頭をたれる。

「はなたれ小僧」「公害たれ流し」などの「たれ」もこの類であろう。

3. 「ガ格」について

「ガ格」(表層で格助詞「が」をとる名詞句)の名詞は、深層の格としてはAである。Aは〔+有生〕の名詞をとるのがふつうである。これは4動詞に共通する。もっとも、〔+有生〕でないような名詞がたつ例もあるが、

(3)a いちようが 実をおとす。

b モーターが 回転をおとす。

(4)a 松の木が 根をおろす。

b トラックが 荷物をおろす。

(5)a 稲が 頭をさげる。

b 飛行機が 高度をさげる。

「たらす」を除く3動詞のこのような例は、比喩(擬人法)もしくは転用とするか、あるいは、制限をややゆるめて〔+自動〕といった素性をたてることによって処理できよう。いずれにせよ、〔+有生〕が原則で、4動詞間に制限の差はないとみてよい。

「ガ格」のなかには、S(起点)であると解釈されるかもしれない例が、わずかながらある。

(6)a 国が (国民に) 年金をおろす。

b ×国民が国から年金をおろす。

(7)a ×銀行が (国民に) 貯金をおろす。

b 国民が銀行から貯金をおろす。

(6)aがそれである。この「おろす」は「下賜する」というニュアンスに近い。この時、「国」はAかつSであり、(6)bからすると、AとSとは一致している方が自然のようである。一方、(7)a、bの例では事情は逆である。

ここでは、一応、Aの実体が想定し難い場合に、本来Sであるものが助詞「が」を伴ってAのごとく「ふるまっ」てその役割をはたす、と解釈しておく。この解釈は、さきにみた〔-有生〕のAをとる文のうち、(3)a、(4)b、(5)aについても適用しうるかもしれない。Sを「カ格」と別に想定しにくいからである。

「おろす」以外の3動詞については、このような例がみあたらなかった。理由は明らかでない。

4. 「ヲ格」について

「ヲ格」の多くはOであり、その場合には、〔+有生〕のもの、いわば「モノ」的に扱われるものとしておく。

Oでない「ヲ格」もある。ひとつは、自動詞においてよくみられる、場所をあらわす「ヲ格」である。

(8)a 筒の中を おとす。

b 長い山道をおろす。

「さげる」「たらす」については使われにくいようである。(8)a、bについても人によってはみとめないかもしれない。もともとOが助詞「を」をとるため、通常は、「ヲ格」がふたつ重なることを避けて、Oが了解されていてあらわされない場合にしか使われない。

もうひとつの「ヲ格」は、Sであると解釈されるものである。

(9)a 船をおろす。

b 議長をおろす。

c 役をおろす。

これらは、「船から」「議長から」「役から」と言うのと同じである。「おろす」以外には適例がみあたらないが、これは、「おろす」がSの方に重点をおいているためと考えられる。

(10)a 東京を 去る。

b ホームを 離れる。

など、移動自動詞にはSが助詞「を」をとるものが多い。つかある。

4動詞とも、Oが〔-抽象的〕の場合、気体に関してはふつう使われず、固体・液体に関しては広く使われる。

液体については、「おろす・さげる」においては注意を要する。例えば、

(11)a 飲料水を 下へおろす。

b 飲料水を 階下へさげる。

のような文では、「飲料水」は「何らかの容器に入れられたひとまとまりの」ものであって、水そのものだけをおろしたり、さげたりするわけではない。

「たらす」では、逆に、容器ごとたらすわけにはいかない。「おとす」は、どちらも可能である。

この点を処理するには、「おろす・さげる」については、本来、固体しかとらず、容器入りの液体は、内容物のみをもって全体をあらわすこともある、とすればよい。また、「おとす・たらす」は〔+重力のまま〕というような素性があると考えられることも、この点に関連する。

固体の場合、「たらす」には〔+細長い〕というような制限がある。

(12)a ×荷物を たらす。

b ? 板を たらす。

c ロープを たらす。

あるいは、〔+柔軟な〕というような限定もつけ加えるべきかもしれないが、今は上記のようにとどめておく。

〔+抽象的〕という素性をもつ名詞をOがとるのは、「さげる・おとす」である。

(13)a ? 本の値段を おとす。

b ×本の値段を おろす。

c 本の値段を さげる。

d ×本の値段を たらす。

(14)a ? 温度を おとす。

b ×温度を おろす。

c 温度を さげる。

d ×温度を たらす。

(15)a 品質を おとす。

b ×品質を おろす。

c 品質を さげる。

d ×品質を たらす。

(16)a スピードを おとす。

b ×スピードを おろす。

c スピードを さげる。

d ×スピードを たらす。

(17)a 位を おとす。

b ×位を おろす。

c 位を さげる。

d ×位を たらす。

(13)a、(14)aも、「急速に」とか「大幅に」とか条件をつけければ、より言いやすくなる。

「おろす」と「たらす」は、ふつう〔+抽象的〕である名詞を〇にとることはない。

5. 多義性について

ここまで、〔+移動〕〔+上から下〕をもつものとしてみてきたが、(12)cは、

(12)c ロープをたらす。(再掲)

必ずしも「移動」とみなくてもよいかもしれない。「さげる」についても同じように

(18) ロープをさげる。

を「移動」でないと考えることができる。

長嶋1975は「ツル・ツルス・サゲル・カケル」をとりあげている。これらをく物体をある場所に固定または設置する」という観点からまとめているのである。すなわち、ここに含まれている「さげる」は、いわば「設置動詞」ということになる。

「移動」と「設置」の差は、場所に関する表現にあらわれる。「移動」には、SとGとが必須のはずであるが、一方、「設置」の場合には設置する場所が必要となる。この設置する場所（以下、便宜的にL (Location) と称することにする）は、もともとSかGであったものとすることも想定しうが、今は別の格と考えておく。

(19)a 壁に 絵をつるす。

b 壁に 絵をさげる。

c 壁に 絵をかける。

の「壁」がLである。この壁が上方にあって、そこに釘などをうってそこに設置するなら、

(20)a 壁から 絵をつるす。

b 壁から 絵をさげる。

c 壁から 絵をかける。

と言ってもよい。この時「壁」は重力が上から下へ働く起点と考えてもよいけれども、いずれにせよ「移動」の起点Sではない。何らかの意味で起点と考えられる「カラ格」の名詞句は多い。しかし、Sとするのは「移動」の起点のみに限定する。

「設置」の意味で使われるのは「さげる・たらす」で、「おとす・おろす」はこの意味では使わない。

(21)a ビルの壁にたれ幕をさげる。

b ビルの壁にたれ幕をたらす。

ただし、「おろす」には次のような例がある。

(22) 戸口にシャッターをおろす。

これについては後にまたみることにする。

(21)をみると、一見ただけで明解なようであるけれども、実は問題がないでもない。

(21) a ビルの屋上から たれ幕をさげる。

b ビルの屋上から たれ幕をたらす。

となると、どちらの意味か即断できない。「たれ幕」のような細長いものでは、「設置」の時、ひとまとまりの状態から一方の端を固定して重力のまま長くのびた状態にする、という動作の間に、もう一方の端が「移動」している。この「移動」をどう考えるかによって解釈がわかれるであろう。

本稿では、「設置」対「移動」という対立で考える限りにおいて、上記の「移動」は二次的なものと考えたい。したがって、物の一端を固定する場合は全て「設置」となる。

さきに、「たらす」の〇は、固体であれば〔+細長い〕という制限があると述べた。この時「たらす」が「設置」であることは、今みてきた通りである。「さげる」が「設置」である時には、〇に同様の制限がありそうである。もっとも

(23) 勲章を さげる。

などの例があるので、「さげる」の方が「たらす」に比べ制限がゆるいように思える。課題として残しておくたい。

さて、さきにあげた(22)であるが、これも「設置」としてよいかもしれない。けれども、次のような例をみると、

(22) 戸口にシャッターをおろす。(再掲)

(24) 戸口のシャッターをしめる。

「閉鎖」をあらわす動詞と同じことがらをあらわしていることに気づく。では、「閉鎖」と考えるべきであろうか。

しかし、両者が決定的に異なる点がある。「しめる」「とざす」「とじる」など「閉鎖」をあらわす動詞は、「ニ格」として、閉鎖される場所をあらわす名詞をとることはない、という点である。「ヲ格」としてならとることがある。例えば、

(25)a 店を しめる。

b 国を とざす。

のように。この時、「戸をしめる。」などでは、直接ある動作（「設置」と同様、ある種の「移動」と考えてもよい）を加えられる対象が「ヲ格」として示されているのに対して、その対象を一部とする全体を「ヲ格」が示している。ここで言う「全体」は、動作の結果状態の変化をうけるもののことである。「おろす」の「ヲ格」には、このような現象はない。

今、「状態の変化」と述べた。「状態の変化」は、実はほとんど全ての動作に伴って起こる。その意味では、「閉鎖」との類似は偶然と言うべきかもしれない。し

かし、

(26) 窓にブラインドをさげる。

(27) 窓にブラインドをおろす。

では、(26)が単に「設置」のみをあらわすのに対して、(27)ではそれによって外光をさえぎることに重点が移っているようである。そして、「二格」の「窓」は、(26)では単に場所であるのに対し、(27)では動作によって変化をうけるものとしてとらえられる。

未だ、これらについての一般的な説明はできない。ここでは指摘にとどめておくと、「おろす」が、このような意味の広がりにおいて最も多彩であるということは注目しておくべきであろう。ある名詞と結びついて特定の意味をもつ「idiom化」とでも呼ぶべき現象も「おろす」については豊富である。

(28) a 肩の荷をおろす。

b この町に根をおろす。

c この港に碇をおろす。

d 人の口に錠をおろす。

6. 「移動」の諸側面

「移動」にはいろいろの属性がある。ひとつは、4.において示唆した〔+重力のまま〕という素性で示される面である。「おとす・たらす」がこの素性をもつ。

(29) a 幕をおとす。

b 幕をおろす。

c 幕をさげる。

d 幕をたらす。

(29) d は、すでに述べたことから明らかなように、「設置」の意味である。そこで、これを別にして(29) a—c をみても、aの「幕」の「移動」は急激で、その動きを制御できないことがわかる。この点は

(30) a ゆっくりとおとす。

b ゆっくりとおろす。

c ゆっくりとさげる。

(31) a 徐々におとす。

b 徐々におろす。

c 徐々にさげる。

という例からも裏づけられる。(30) a も(31) a も言えないわけではない。しかし、b・cと同じように「移動」動作について「ゆっくりと」「徐々に」とあらわした文としては不適格である。「たらす」についても

(32) a ゆっくりと水をたらす。

b 徐々に水をたらす。

は、「移動」が「ゆっくりと」しているのでも「徐々に」移動するのでもない。「移動」をひきおこすまでの動作

か、あるいは、いくつかの「移動」動作のくり返しをひとまとまりの動作としてみた場合の動作全体か、いずれかについてであると考えられる。

急激で、制御できないのは、〔+重力のまま〕という素性から必然的に導き出される性質である。

また、「おとす」は意志動詞として使われる(上述の結論にかかわらず)けれども、それは、「移動」を「ひきおこす」のは、Aの意図によるからで、いったん「移動」が始まればとどめるわけにはいかない。そして

(33) 財布をおとした。

では、その「移動」をひきおこす前の動作も無意志的なため、無意志動詞でもある、とされるのである。

同じく〔+重力のまま〕から導き出される性質として、過程が問題にされないという側面がある。顕著にあらわれるのは

(13) a 本の値段をおとす。

c 本の値段をさげる。

(17) a 位をおとす。

c 位をさげる。

(再掲)

など(13)―(17)のaとcにみられる「おとす」と「さげる」の対照である。「さげる」の「移動」は、連続的・段階的であると感じられるのに、「おとす」の方は、非連続的・非段階的であると感じられる。〔+重力のまま〕は〔+抽象的〕の場合には都合が悪いので、〔一過程的〕という素性をみとめることにする。

もうひとつ、「移動」の属性としてとりあげておきたいのは、〔+終結性〕という素性である。この素性をもつのは、「おとす・おろす・たらす」である。「おろす」と「さげる」を対比しながらみてみよう。

(34) a 遮断機をおろす。

b 遮断機をさげる。

(35) a 幕をおろす。

b 幕をさげる。

(36) a 帆をおろす。

b 帆をさげる。

(37) a 碇をおろす。

b 碇をさげる。

(38) a 腰をおろす。

b 腰をさげる。

これらの文のaとbとの微妙なニュアンスの違いは、〔+終結性〕を想定することで説明できる。aには、「終わりまで」という意味あいを感じられるのである。さらに

(34) a 遮断機をおろした。

遮断機をさげた。

- (35) a 幕をおろした。
 b 幕をさげた。
 (36) a 帆をおろした。
 b 帆をさげた。
 (37) a 碇をおろした。
 b 碇をさげた。
 (38) a 腰をおろした。
 b 腰をさげた。

とすると、b文では、「移動」が始まったことを意味しているが、「移動」が完了しているかいないかは述べていないのに対し、a文の方は、一般に、「移動」が完了していることを意味するものと受けとられる。したがって、「さっきさげたのに、まだおりていない」ということはありうるけれども、「さっきおろしたのに、まださがっていない」ということはありえない。

5.において指摘した、「おろす」の閉鎖動詞との類似は、実はこの〔+終結性〕という素性と深く関わっている。「状態の変化」は「移動」の完了とともに明確になる、と考えれば、よりわかりやすいであろう。

「おとす」「たらす」が、この面では「さげる」の類でなく、「おろす」の類に属することは、説明するまでもあるまい。

最後に〔+上から下〕に反する場合もあるのではないかと、と思われるような例についてふれたい。「おろす」では

- (39) a 乗客を電車からおろす。
 b トラックから荷物をおろす。
 c 新しい服をおろす。

などの例がある。また、

- (40) 小売店に品物をおろす。(卸す)

も含まれるかもしれない。これらは、〔+上から下〕を全く失っているわけではない。物理的には反する場合にも、「のりもの」「荷台」から地上へ、あるいは「うやうやしくしまつてあったところ」から使用する現実へ、というような、いわば「心理的な」上下関係を想定しているのではなからうか。注目すべきことは、要するに〔+上から下〕よりも〔+終結性〕へと重点が移り、それに伴って、「状態の変化」が強調される結果になっていることである。

「さげる」には、次のような例がある。

- (41) a 安全な所まで群衆をさげる。
 b ふたりの前から、あいた茶碗をさげる。
 c 芸者を座敷からさげ、密談する。

d 女中が膳をさげに来る。

これらにも何らかの上下関係を想定しうるけれども、重要なことは、「さげる」がある位置からある範囲外へ動かすことに重点がある、という点の方である。〔+終結性〕が、この性質を導きだす。つまり、「どこへ」よりも「ここ(S)でないどこかへ」が重要であり、物理的な上下は重要でないものとなる。

7. その他の用法

さきに、5.の最後で「idiom化」についてふれた。そうした例も含めて、いくつかの例をあげておく。「さげる・たらす」にはあまり例がなく、勢い「おとす・おろす」に集中することになった。

- (42) a 髪をおろす。
 b 子供をおろす。
 c 枝をおろす。
 d 魚を三枚におろす。
 e 大根をおろす。
 (43) a 命をおとす。
 b 垢をおとす。
 c 色をおとす。
 d つきものをおとす。
 e 城をおとす。
 f 力をおとす。
 g 罪をおとす。

これらの例は、「おろす」が〔+終結性〕、「おとす」が〔+終結性〕〔-過程的〕をもっていることから派生したものと考えられる。

8. おわりに

以上の記述についてまとめておく。表IIは〔+抽象的〕な「移動」の場合、表IIIは〔-抽象的〕な「移動」の場合である。

	A		V			
	有生	抽象的	移動	上から下	過程的	終結性
サゲル	+	+	+	+	+	-
オトス	+	+	+	+	-	+

表 II

	A		O		V			
	有生	抽象的	固体	液体	移動	上から下	重力のまま	終結性
サゲル	+	-	+	-	+	+	-	-
オロス	+	-	+	-	+	+	-	+
オトス	+	-	+	+	+	+	+	+
タラス	+	-	-	+	+	+	+	+

表 III